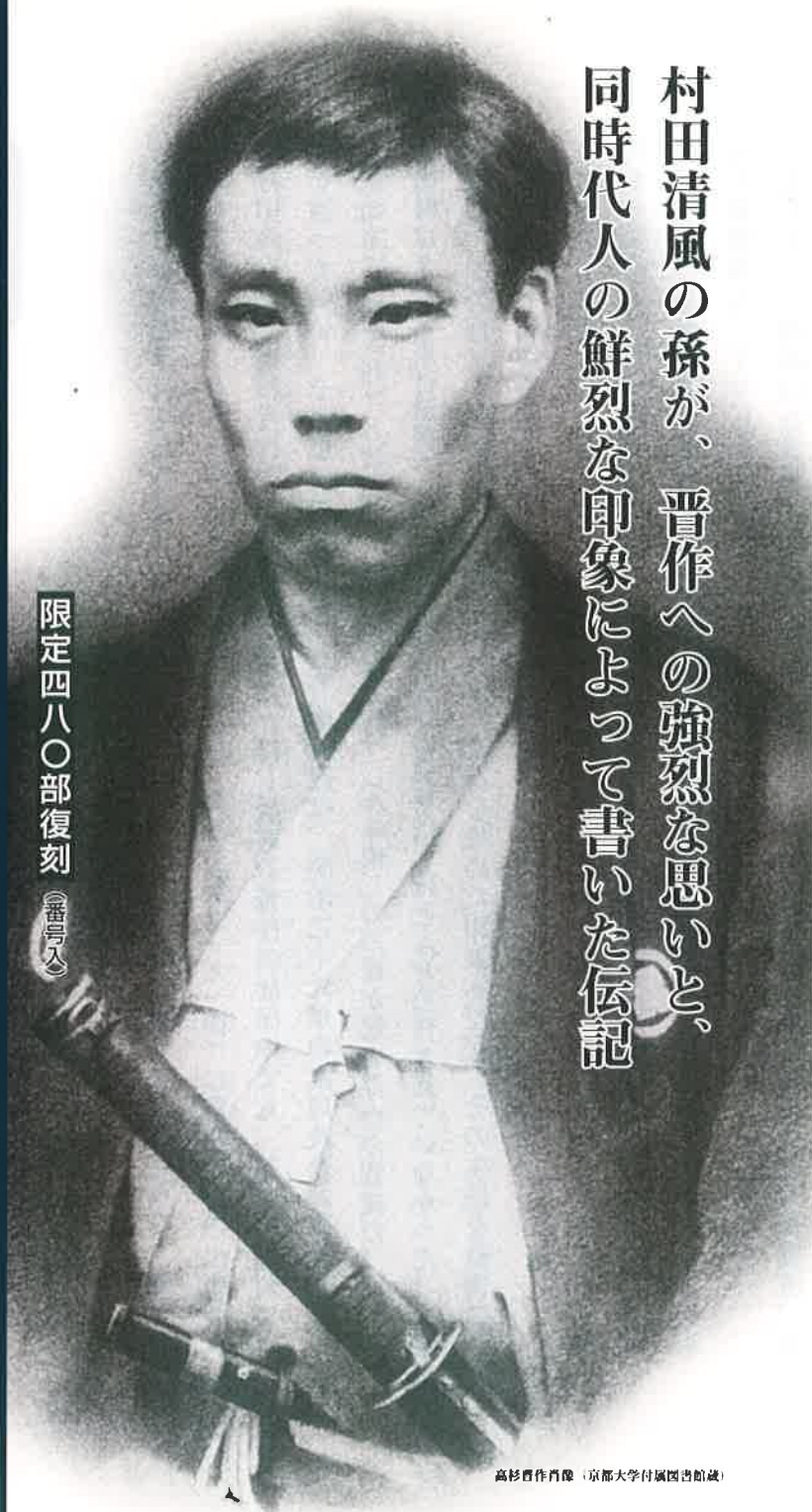


片また國家のためには、髪を剃り獄に入るを避けさりき、高杉逝て四十七年、物換り星移り、世態の變遷は、全く別天地の現象を呈す、政體制度百般の事、固よりみな面目を改めたりと雖も、國家に對する誠意に至りては、決して萬世變すへき筈なし、忠君愛國はた、日本主義の道德を誠實に發揮し、はた神聖なる風教を金甌無缺に保持せんこと、決して異議あるへきものにあらす、高杉は勤王報國と云ふことには、萬事を排して躍起せる人なり、何時も名譽金錢と云ふ如き、權勢を加ふへき利慾を増すへき利己主義には、毫も左袒を好まざる人なり、寧ろ絶對に擯斥することを務めたり、若し高杉をして、現今上流名士の、餘りに金錢名譽の爲に、苦慮狂奔するの狀態を目撃せしめたらんには、噴飯哄笑、彼等に向て唾し去るへきものあらん、高杉か官武周旋を否定せるは、流石の先見なり、内訌打破、國論回復も、他人の及はざる卓識なり、尊攘主義を以て、大政維新の基礎と決し、對外開戰を以て

村田清風の孫が、晋作への強烈な思いと、
同時代人の鮮烈な印象によって書いた伝記

限定四八〇部復刻 (番号入)



高杉晋作肖像 (京都大学付属図書館蔵)

高杉晋作

村田峰次郎著

マツノ書店

高杉晋作 目次



慶応二年、長崎上野彦馬写真館で撮影された高杉晋作。着流しに羽織り、断髪に素足という印象的な姿で椅子に腰掛け、左手には長刀を握る

序言	尊攘主義	黨議兩立
年譜	梅屋敷と御殿山	筑前潜伏
家祖 出生	勤王烈士の遺骨改葬	對帆樓の會見
時勢と改革	剃髪して東行と號す	内訌戰
青年時代	賀茂行幸と西歸	藩論一致
松下塾入門	奇兵隊の編成	大阪及讃岐行
游學	堺町門の變と七卿落	長州再征
師恩に酬ゆる	京都動亂	終焉
最後の盡力	亡命と投獄	逸事
官武周旋	馬關攘夷	追遠表彰
名家歴訪と外國行	長州征伐	解説 一坂太郎

■村田峰次郎の『高杉晋作』はあらゆる「晋作伝」中のベストセラーとして知られています。晋作は手垢のついた本書をよく古書店で見かけましたが、今は全く入手困難となり、このたび八八年ぶりに復刻されるものです。

ぜひこの機会に『高杉晋作史料』と一緒に、お得な「二点セット特価」でお求め下さい。

■著者の村田峰次郎は、幕末長州藩立直しの祖・村田清風の孫としても知られている、防長史の権威です。

安政四年誕生まれ。山口明倫館に学び、明治一七年、内閣で伊藤博文の憲法制定事務に参加。同二三年「長周叢書」を刊行の後、毛利家に入り藩史編纂を主宰。同四二年、防長史談会を発足。昭和二〇年没。主著「大村益次郎」「品川子爵伝」「防長近世史談」など。

■体 裁 A5判 三〇頁

■定 価 クロス装製 箱入 七千円(税込 千380円)

■予約特価 五千円(税込 千380円)

▼同時進行なので、売切れの節はご容赦下さい。

■締 切 平成14年6月末日

■発 売 " 7月上旬予定

限定四八〇部復刻 (番号入)

山口県徳山市銀座一の三
〒745-0032 ☎〇八三四〇二九五
FAX〇八三四〇三九五

マツノ書店

身體健康なりと雖も、精神既に枯死せる者あり、壽命百歳に躋るも、未だ十年の事業を成就せざる者あり、高杉は一身、夙に病に斃るゝと雖も、精神今猶ほ生けるか如し、壽命未だ三十に至らざるも、その功績は百歳の豪雄を凌越せり、

今日社會の各方面に於て、尊重さるゝ所の代表的人物の事業は、常に如何なる行爲を顯發し居るや、何事も餘りに金錢問題を以て、貴重とする紛擾の多きには驚かざるを得ず、彼の新聞紙の報道を見ずや、當路の政治家、軍人、宗教家、教育者の如き、動もすれば、往々金錢上の醜行を以て、世上の物議を沸騰せしむるもの多く、學校に教ふる所と、社會に行ふ所とは、正に矛盾相反することのみ、彼等は金錢の前には廉恥を忘れて、忽ち醜敵に降伏するを躊躇せず、故に上流社會に於て、比較的醜聞の多きを見る、これ新聞公報の證言する所なり、高杉は人と議合はされは、直ちに官職を抛ち食祿を辭し、誠心一



村田峰次郎『高杉晋作』について

東行記念館副館長・学芸員

一坂 太郎

明治以来出版された高杉晋作の評伝のたぐいは、おそらく数十種を数えるだろう。講談・小説を含めると、さらにその数は増える。この、大正三年（一九一四）に民友社から出版された村田峰次郎『高杉晋作』（以下本書とする）は、数ある晋作の評伝中でも、初期の部類に属すと言っている。それ以前のまとまった晋作伝記は、明治二十六年の江島茂逸『高杉晋作伝入筑始末』（団々社）と渡辺修二郎『高杉晋作』（少年園）の二冊が思い浮かぶ程度だ。

当時はまだ『東行遺稿』（上下）以外、晋作の史料は、ほとんど公刊されていなかった。『東行遺稿』は晋作二十年祭で出版された、主に漢詩を集めた和装本だが、その生涯を緻密にたどるには役不足の感は否めない。

こうした時代に書かれた本書は、当時としては精一杯の労作だったに違いない。しかし現代から見ると、特に史料面で物足りないものを感じる。たとえば遊歴の道中日記「試撃行日譜」や、唯一の海外体験を記録した「遊清五録」も使われた形跡が無い。あるいは所々に収められた書簡類も、十分に生かされているとはいえない。

むしろ、「高杉は近世稀に顕はれたる英傑にして、その行動の迹（あと）を見るに、天真爛漫、事みな機宜に当らざるなし、天下有為の壮者一たび之が伝記を誦せば、何人か必ず感奮興起せざるを得ん」といった、村田の晋作に対する強烈な思いこそが、本書最大の魅力である。四ページ以下には村田の祖父清風が若いころ、晋作の曾祖父春明に私淑した史実が紹介されている。この一事を見ても、村田にとり晋作は歴史上の人物の枠を越えた、身近な存在だったことがうかがえよう。

村田も、晋作にかんする様々な逸話を聞きながら育ったと思われる。晋作没後四十数年しか経ておらず、人々の脳裏にその印象は鮮烈に残っていた。

例えば晋作が「同志の者は、何時戦没するや測り難し、皆互に予め生墳を築くこそ妙策なれ」と、下関桜山に共同墓地を開き、これが招魂場に発展したという話などは、驚かされる。史実とすれば「生墳」こそが招魂場創立の目的ということになり、神道史上においても特筆すべき文献だ。

あるいは「対帆樓の会見」の項では、「甲子十二月某日、馬関の対帆樓に於て高杉は西郷と重ねて会見す」とし、以下村田の持論が展開される。この両雄の会見の虚実に関しては『修訂防長回天史』（大正八年）をはじめ、今も否定的な意見が強い。しかし村田は、西郷の随行者黒田清綱からも話を聞いたとし「これ慥なる証跡にして、最早別に争ふべき事柄にあらざるべし」と、全面的に会見肯定の立場である。

本書出版から二年後の大正五年、晋作の五十年祭が東京で盛大に行われた。その記念事業のひとつとして『東行先生遺文』が出版され、人々は初めて「書翰」「日記及手録」「詩歌文章」といった晋作の「生の声」に触れることになる（村田もまた、編纂委員の一人として名を連ねている）。本書は『遺文』出現以前、晋作伝記研究が到達していたレベルを示すもので、その格調高い文章と共に忘れてはならない名著であると言えよう。